



モルヒネ中毒に中枢を冒された一詩人の 取りとめもないデカダンスの幻覚か？

明治19年、群馬県の裕福な開業医の息子として生まれた萩原朔太郎は、生来の虚弱体質と強い自意識から高等学校（現在の大学）で落第と中退、転校を幾度となく繰り返し、28歳で詩人として雑誌デビューするまでで言うところのニートな生活を送った。

34歳で結婚、40歳のときによやく実家を出て東京に移り住むものの、56歳で死去するまでに2度の離婚を経験するなど、その生涯はまさに日本の近代作家を彷彿とさせる「文学的」なものであった。

「まつくろけの猫が二足、／なやましいるの家根のうへで、／びんとたてた尻尾のさきから、／糸のやうなみかづきがかすんでゐる。／『おわあ、こ

んばんは』／『おわあ、こんばんは』／『おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ』／『おわああ、ここの家の主人は病氣です』（萩原朔太郎詩集『月に吠える』「猫」より）

朔太郎が実際のところ、「病氣」として形容されるような性格であったか否かはわからない。だが、その詩に表現されている「かなしさ」「さびしさ」「なやましさ」が、ほぼ一世紀にわたり、ともすれば病的なほどに繊細な一群の読者の心を捉え続けてきたことは事実だ。

版画家の金井田英津子もまた、その一人だ。1955年、朔太郎と同じく群馬県に生まれた金井田は、56年に朔太郎の『猫町』をテーマにした版画の

個展「猫町紀行」を名古屋で開いた。そこに偶然立ち寄った編集者の目に止まり、本の装幀挿画を手がけるようになる。

その後、本にオリジナル版画を直接刷り込みたいという金井田の希望は、97年に最初の画本『猫町』（バロル舎）として陽の目を見る。さらに、「映像というコントロールされた時間の中で、自分のイメージを使って物語をゆっくりと読み解いてゆきたい」という望みが形になったのが今回の画二冊『猫町』だ。幻想的でありながら確かな筆致を感じさせる金井田の版画と、バウロックで鍛えた低音を淡々と響かせる町田康の朗読、そして、控えめでありながら存在感を主張する海田庄吾のピアノが相俟って、幻覚とも現実ともつかない「猫町」をモニターの中に出現させている。

監督の浦昌昌二郎は、今回初監督ながらCMエディターとして培ってきた映像的センスを遺憾なく発

揮し、朔太郎の幻覚世界を見事にまとめ上げた。

不遇とも言える一生を送った朔太郎が、もし生きていたとしたら、きっと感動したことだろう。なんとなれば、ややもすれば社会不遇だとレッテルすら貼られかねない朔太郎の震えるような感受性が、ここでは、しっかりと居場所を主張して存在しているのだから。

朔太郎が求めているのは、幻覚や妄想として片づけられない風景を覗いてしまうおのれの心が、ただ単にそうあるものとして世の中に認められること、だったような気がしてならない。

「大のころは恐れに青ざめ／夜陰の道路にながく吠える。／のをあるとをあるのをあるやわああ／『犬は病んでゐるの？ お母あさん。』『いいえ子供／犬は飢えてゐるのですよ。』（萩原朔太郎詩集『青猫』『遺傳』より）

